

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第67弾をお届けします。

(シリーズ担当：R.I.)

第67話 ウンカと享保大飢饉

江戸時代には、全国的な飢饉が35回もあったそうです。なかでも、寛永19～20年(1642～43)、享保17年(1732)、天明3～7年(1783～87)および天保7～8年(1836～37)の飢饉が特に大きく、これらを江戸四大飢饉と呼びます。寛永の大飢饉は、大雨、洪水、干ばつ、霜など異常気象と虫害が、享保の大飢饉は冷夏と虫害が、天明の大飢饉は浅間山大噴火と冷害が、天保の大飢饉は大雨、洪水と冷夏が、それぞれの原因になったとされています。

享保の大飢饉は、前年末からの悪天候が、年明けて享保17年(1732年)になっても回復せず、梅雨明けが例年より2ヵ月も遅れて、冷夏になったため、イネはまったく育ちませんでした。そこにウンカの大発生が重なって、イネに甚大な被害をもたらしたのです。

被害は、西日本を中心に発生し、死者約1万2000人、飢えに苦しんだ人実に200万人に及んだと言われます。しかし、この数は各藩が幕府に少なく報告していたためであり、実際の被災者はもっと多かったようです。19世紀前半に編纂された「御実紀」(通称「徳川実紀」)という江戸幕府の公式史書には、死者約97万人、飢餓に苦しんだ人250万人との記録が残されています。

特に状況がひどかったのは、現在の中部地方、四国、九州北部の各地域であり、なかでも、瀬戸内地方が、甚大な被害を受けたとされています。

このように、享保の大飢饉による被害は、西日本を中心に発生しましたが、それが原因となった「享保の打ちこわし」は、翌享保18年(1733年)に江戸で起こりました。

「打ちこわし」とは、都市に住む貧しい人々が米価の引き下げを求めて、米商人を襲う民衆運動のことです。「打ちこわし」も「百姓一揆」も、18世紀以降、とくに大きな飢饉の後に多発しました。これは、コメの不足で生活に苦しむ人々が、不満をぶつけたものです。ところで、「打ちこわし」は困った人たちが団結して決起し、コメが保管されていた蔵などを襲って、コメを強奪する「米よこせ」運動であり、「百姓一揆」は農村で「年貢を減らせ」と領主に直訴したり、領主や村役人らを襲ったものです。また、実際の打ちこわしでは、物を盗んだり、放火したりする行為に及ぶことはなく、貯蔵されているコメを撒き散らす程度だったとも言われています。

江戸幕府は、享保の大飢饉で被害がひどかった西日本地域において、飢餓に苦しむ人々を助けるために、コメを分け与えました。しかし、皮肉なことにこれが原因となり、江戸では、

コメの価格が約5倍にも値上がりしてしまいます。

そんな中、米問屋の^{たか}高間伝^ま兵衛^{でんべえ}は、八代将軍徳川吉宗に協力し、コメの価格の安定化を図るべく尽力していました。ところが民衆には、高間伝兵衛がコメを買い占めて、価格を釣り上げていると勘違いされ、襲われてしまいます。これが、「享保の打ちこわし」事件です。この打ちこわしに加わった民衆の数は1700人にも上り、高間伝兵衛の家財道具や米俵は、川に捨てられてしまいました。しかし、打ちこわしの被害に遭いながらも、高間伝兵衛は自身が所持していた多量のコメを放出し、米価の安定に努めました。

幕府は、この事態への対策として、「囲い米」を解放してコメの価格を下げようとしたが、コメの価格を下げることはできず、失敗に終わりました。

「囲い米」とは、江戸時代に幕府や各藩が万が一に備えてコメやその他穀物などを社倉（江戸時代に設けられ、庶民の収入に応じて貯蔵、貸与などの目的で自治的に管理されたもの）や義倉（国内の要所に設けられた倉庫で、災害や飢饉に備えて食糧を庶民から集めたり、富者から寄付してもらったりして貯蔵したもの）に蓄えて、万が一に備えた備蓄制度のことです。

一方、凶作の被害が深刻であった瀬戸内海沿岸地域にあっても、^{おおみしま}大三島（現在の愛媛県今治市）だけは、^{あさみ}下見吉十郎がサツマイモの栽培を広めていたため、享保の大飢饉の被害を免れ、餓死者を出すことなく、むしろ伊予松山藩（現在の愛媛県松山市）に、余ったコメを献上する余裕があったほどでした。同じように九州地方でも、島津氏の薩摩藩領だけは飢民が生じなかったといわれています。

また、60歳という高齢で勘定役から大森代官（石見銀山および備中国・備後国に散在する天領の管理）に抜擢された井戸^{まさあきら}正明（平左衛門）は、享保の大飢饉による領内の窮状を目の当たりにし、領民たちを早急に救うため幕府の許可を待たずして年貢を減免、年貢米を放出、商人らに寄付金を募り、さらには官金や私財を投入しました。享保17年（1732年）、薩摩国の僧からサツマイモが救荒食物として適しているという話を聞き、種芋を移入しました。その年にサツマイモの種付けを試みましたが、種付け時期が遅かったことなどもあり期待通りの成果は得られませんでした。しかし、^{ゆのつ}邇摩郡福光村（現・島根県大田市温泉津町福光）の老農、松浦屋与兵衛が収穫に成功します。その後、サツマイモは石見地方を中心に救荒作物として栽培されるようになり、多くの領民を救ったのです。この功績により正明は領民たちから「芋代官」と称えられ、今日まで顕彰されるようになりました。

享保の大飢饉の発生後、徳川吉宗は飢餓対策として、全国各地でサツマイモの栽培を推奨します。サツマイモは、15世紀後半にコロンブスが南米原産のサツマイモをヨーロッパに持ち帰った後、アジアにも伝わり、1600年頃中国から、琉球を経由して、元禄11年（1698）に薩摩国（現在の鹿児島県西部）に伝わり、日本各地で栽培されるようになります。

江戸生まれの蘭学者「青木昆陽」は、痩せた土地でも育ち栄養価が高く、長期保存可能なサツマイモが、飢饉が発生した際の非常食として最適であることを自著「蕃薯考」（ばんしょこう）にまとめ、享保20年（1735年）、江戸幕府に上書します。徳川吉宗は、すぐさま青木

昆陽に、現在の東京都文京区にあった「小石川御薬園」（現在の東京大学大学院理学系研究科附属植物園 [通称：小石川植物園]）など、関東地方の施設におけるサツマイモの試作を命じました。

関東地方の気温は低く、霜が原因で最初は上手く育ちませんでしたが、青木昆陽は苦勞の末に、サツマイモの栽培を成功させ、やがて全国各地で栽培されるようになったのです。この功績により青木昆陽は、享保 21 年／元文元年（1736 年）に「薩摩芋御用掛」を拝命し、「幕臣」に就任しました。

サツマイモは強健な性質で干ばつに強く、痩せた土地でも育てやすい植物です。享保の大飢饉でも被害に遭うことなく栽培できたため、すでにサツマイモを育てていた地域は、飢餓に苦しむことはありませんでした。

のちに起こった「天明の大飢饉」と「天保の大飢饉」の際にも、サツマイモが食料として重宝され、多くの人々の命が救われたとされています。

（参考・引用文献）

日本史事典.com <https://nihonsi-jiten.com/kyouhou-no-daikikin/>、
刀剣ワールド「享保の大飢饉」 <https://www.touken-world.jp/tips/11111/>
Wikipedia「井戸正明」（2022 年 4 月 3 日閲覧）